

Series of the Ticket
シリーズ・ザ・チケット

パラレル

4

108

Series of the Ticket
シリーズ・ザ・チケット

パラレル

4

108

あなたがそこにいる限り、あなたの現実は常に白紙だ
目の前には無地の広大なキャンバスが広がっている
そこに何を描き込もうが、文字通りあなたの自由だ
白紙のキャンバスはあなたがどんな絵を描いてくれるのか
今か今かと待っている

まえがき

パラレルもいよいよ第四弾。

今回は前回に引き続いて過去改変のお話から始まりますが、最初の方で意外なトピックが出てきます。

これはちよつと驚くようなお話で、初めはなかなか信じられないことかもしれません。

「もしそれが本当なら、最初からパラレルを読む必要なんてなかったんじゃないか！」

きつとそうお感じになることと思います。

そしてもしそれが本当なら、どうして自分は望むような現実ライ

ンに移動できていないのか？

それが大いなる謎としてあなたに迫ってくることでしょう。

しかし読み進めるうちに、その謎はどんどん解けていくに違いありません。

それとともに「今この瞬間」がどうして全てを可能に出来る場所なのか、明らかになります。

そして最後の章では、本当のパラレルシフトが我々の世界にどんな変化をもたらすのか、その姿を垣間見ることになります。

それはあなたの求めている世界でしょうか？

それともあなたの手に余る世界でしょうか？

それを確かめてください。

それでは「パラレル4」スタートです。

パ
ラ
レ
ル
4
イ
ン
デ
ッ
ク
ス

プロローグ 13

Act 1

実行されていたパラレルシフト 26

Act 2

スマホの傷は消せるか 39

スマホの傷はいつ出来た？ 40

原因と結果 47

特定されない原因 51

Act 3

分散する因果	67
存在しない原因	76
無限のリトライ	85
リトライ可能な世界	86
無間地獄	96
永遠のモグラ叩き	104
修正の起点	120

Act 6

あみだくじの誘惑

171

留め置かせようとするもの

172

関連づけを放棄できる場所

166

連鎖を断ち切る鍵

162

生み出され続ける後悔

156

エゴの作り出す幻想

150

Act 5

時間という名の幻惑

149

Act 4

変更されていた過去

127

ルールの作り出す愛惜
177

Act 7

レーンの選択
191

時間線の逆生成
192

何故実像に沿ったシンプルな選択が難しいのか？
193

何故過去を変更することが困難であるのか
197

では実像に従ったシンプルな選択を実行するには？
200

Act 8

外から見た迷路
207

上手な手の引き方
208

あとがき

259

Act 9

大転換

237

幻想の終わり

238

不満という残骸
リプレース
217

211

プロローグ

ではお話を続けましょうか。

「続けましょうかって…どんな話だったか、もう忘れちゃいましたよ」

そーいや、前回のパラレルでお話したのが2月末ですもんね。
およそ8ヶ月ぶりですよね。

「人ごとみたいに！8ヶ月ですよ、8ヶ月！いくら何でも空きすぎです。
それだけ空けば前作の内容なんて忘れちゃいますよ。正直言って、も
う待ちくたびれました」

それは申し訳ありませんでした。

でも、パラレル3のあとにデバッグ2とMONNEYが公開りされたので、それほど久しぶりという感じでもないんじゃないですか？

「特にMONNEYは、ほとんどパラレルと言ってもいいような内容でしたからね…」

いや、違う違う。そついうことじゃなくて、パラレルから8ヶ月も間が空いたことが問題だと言っているんですよ」

8ヶ月空いたことがそんなに問題でしょうか？

「問題ですよ！過去の変更についてあんなに引つ張っておいて、もの凄いなさめだったじゃないですか」

段々とパラレル3について思い出してきたようですね。

「お陰様で思い出してきましたよ。」

『過去を変えたい』と言う私に対して、あなたは、

『その立場で過去を変えたいと思ってても意味がない。たとえ望む過去

の時点に戻ってやり直したとしても、結局あなたは同じような経験をすることになる』

こう言いましたね」

ええ、要約するとそういう意味のことを言いました。

「それで私が『過去に戻って選択をやり直しても同じ結果になるのだ』たら意味がない』と言つと、あなたは、

『今あなたが気づいたとおり、あなたが変えたいのは本当は過去なんかではなく今現在なのだ』と言つた」

正確にはそういった表現は使ってはいみせんでしたが、要約としては完璧です。見事ですすよ。

あなたは読書感想文とか得意な方だったでしょ？

「別にそれほどでも…てか、そんなことはどつどもいいんですよ。

で、あなたは『今現在ならどんな風にも変更できるし、あなたが働きかけることができるのは、とどのつまり今だけなのだ』と言った」

ほうほう。

「それで充分なのだ。それによつて敢えて変えようとなんてしなくても、過去は勝手に変わる。そして、もちろん未来も…」

…それから？

「…それからって、…いつで終わってるんですよ」

そりゃあ気になりますよね。

「うわあ……じゃないー！」

今要約していただいたおかげで、どれだけ酷い終わり方だったのか、読者としての立場で理解できましたよ。

「しかも読者はこの状態で8ヶ月もお預けを食らっていたんですよ！」

うわあ……

「うわあ……じゃないー！」

次からは終わらせ方に充分気をつけます。

「また8ヶ月待たせても良いようにですか。終わらせ方なんかより、続きをできるだけ早く読めるようにして欲しいですね」

善処します。

「政治家が『善処します』って言うときは『何もやらない』っていう意味だと聞いてますけどね」

私は政治家じゃありませんけどね。

分かりました。次作からは続きをなるべく早く読めるようにします。

「お願いしますよ」

プロローグ

Act 1

実行されていたパラレルシフト

散々お待たせしたようだから、早速本題に入りましょうか。

…いや、本題に入る前に一つだけ重要なことをお伝えしておこう
と思います。

「なんですか重要なことって」

この本は「パラレル」ですよね。

「ええそうですね。何を今更」

ここであなたは望む人生ラインを自由自在に移動できるように
りたいんですね。

「もちろん。それが究極的な目標です」

せっかく究極的目標に置いているところを誠に申し訳ないんです
が…

「なんですか改まって」

実は、あなたはそれをもうやっちゃってるんです。

「やっちゃってるって、何をですか」

だから「望む人生ラインへの移動」ですよ。

「ああ、そういうことですか。それはもうこれまでの説明で理解して
いますよ。」

一秒後の世界は言ってみれば別の物理現実だ。私はそれを時間線と
いう信念に従って選択的に移動している。

私が『普通の時間的経過』と考えている現実を、私は意図的に移動し続けている。そういっていいんですよね？」

それはそうなのですが、私が言ってるのはそういうことじゃなくてですね…

「なんなんですか。歯切れが悪いなあ」

もう言っちゃいましょうか。

あなたは、あなたが「究極的な目標」と言った方の、いわゆる一

一般的な意味でのパラレルシフトを、既にやっているんです。

「え？そんなのまだ出来てませんよ」

いえ、出来てるんです。

「うえ、出来てなごびちちよ」

いや、出来てるんです。

「…」

…。

「…そんな馬鹿な」

その馬鹿なことが本当のことなんですよ。

「…あなたと話をするうちに、知らず知らず勝手にその能力が身についちゃったってこと？」

パラレル 4

2012年10月24日 初版第1刷発行

著者 108
発行 インテグレイテッド・インフォ

©108
All rights reserved

本書は著作権法によって保護されています。
本書の内容を無断で転載、記載することは禁じます。
本書を無断で譲渡・転売することを禁じます。